

R&D拠点に商社人材

3社と協働 新ビジネス構築へ

BASF ジャパン

BASF ジャパンは、デイスパージョン & レジン事業で大手商社と連携した新たなビジネスモデルを開始する。六呂見地区（三重県四日市市）に新設したR&Dセンター内に長瀬産業、三井物産プラスチック、豊通ケミカスの技術サービスの専門人材を配置。商社の知見を活用することで、開発テーマ創出から新製品開発、スケールアップ、顧客対応まで担う同地区の一貫体制をより強固なものとする。商社がメーカーの役割を一部担うことで、BASFは新製品開発に注力し、成熟市場で差別化が難しいといわれてきたインキ・コーティング分野の競争力強化につなげる。



六呂見地区に新設されたR&Dセンター。新製品開発からスケールアップ、顧客対応までを一貫体制で担う。

昨年6月に六呂見事業所内に六呂見R&Dセンターを開所し、デイスパージョン・レジンの研究開発機能を尾崎から移転した。事業部ヘッドやセーラー、R&D、サプライチェーンマネジメント（SCM）、生産も集約し、今

月から六呂見事業所旧六呂見工場に名称変更している。ユニークなのがR&Dセンター内に複数の商社の技術サービスの専門スタッフを常駐させたことだ。商社がマーケットイ

ンデンでのニーズの汲み上げや技術サービスの提供と

いった役割を肩代わりすることで、BASFは顧客の声に応える新製品開発に専念できる。3社には従来から営業・販売業務を委託してきたが、商社は顧客の要望を吸い上げてBASFに伝えるのにとまっていた。新たなモデルでは

商社とメーカーが同じセンター内で協働し、商社が直接顧客対応することで、その知見の共有や直

接のフィードバックが可能となる。商社は製品の知識や知見を蓄積できるため、従来以上に質の高い顧客対応が期待できる。

では新製品開発からスケールアップ、顧客対応までを一貫体制で担う。BASFデイスパージョン & レジン事業部長の杉藤正史氏は「商社とビジネスオペレーションを組み込んだ今回のような取り組みは、グループの他の拠点でも例がない。商社が汲み取った顧客ニーズを製品開発により迅速に反映できるよつになり、幅広いネットワークから今後のビジネス創出の可能性も広がる」と期待を寄せ

六呂見ではサイト内でビジネスを完結できるようになった一方、デジタル技術を活用することで、グローバルの知見も積極的に採り入れている。世界に約70ものR&D拠点を構えるBASFは、「Knowledge System」と

いったデジタルシステムを整備しており、「社内研究情報や文献へのアクセス、テキスト検索やデータマイニングなどのツール」をフルに活用していく。機能もさらに拡張しながら、他との差別化につなげていく。（山田英樹）